

第 80 回 株式会社 USEN 放送番組審議会 議事録

■開催日時

2024 年 4 月 17 日 (水) 16:00～

■開催場所

東京都品川区上大崎 3-1-1 USEN 本社



■出席者

湯川 れい子 委員長

富澤 一誠 委員

品田 英雄 委員

長谷川 演 委員

和合 治久 委員

■局側出席者

代表取締役社長 貴船 靖彦

コンテンツプロデュース統括部長 山下 光儀

コンテンツプロデュース統括部編成部長 松本 茂雄

コンテンツプロデュース統括部制作部長 村田 徹

コンテンツプロデュース統括部制作部制作1課長 小島 万奈

コンテンツプロデュース統括部制作部制作1課 大森 有花

コンテンツプロデュース統括部制作部制作1課 北村 魁知

【番組審議会事務局: 森角、北村、大園】

議事内容

1. 会社動向、放送事業動向についての報告

(1) 第 60 期第 2 四半期経営成績について

店舗サービス事業の売上・営業利益は、59 期比増収増益で推移した。

(2) ホールディングス商号変更について

2024 年 4 月 1 日に、「株式会社 USEN-NEXT HOLDINGS」から「株式会社 U-NEXT HOLDINGS」へと、商号変

更を実施した。

(3)4月番組改編について

2024年4月1日に、番組改編を実施した。インバウンドに向けたチャンネル、ジャンルを新設した。また、音楽アーティストの「推し活」の一環として、誰でも参加出来る曲投票サービス「USEN 推し活リクエスト」を2024年3月27日より専用WEBサイトにて公開し、楽曲リクエスト(投票)の受付を開始した。併せて、お客様のリクエスト投票に基づいたランキング番組「USEN 推し活リクエストランキング」を開始した。

(4)日本最大のタクシーサイネージメディアへの「音楽コンテンツ番組」放映開始について

2024年1月15日より、日本最大のタクシーサイネージメディア「TOKYO PRIME」にて、USENの「音楽コンテンツ番組」として「月間 USEN HIT J-POP ランキング」のカウントダウン動画を提供開始した。

(5)追悼番組の放送について

「K02 臨時特集 1」にて、2月27日～3月27日まで、2月6日に逝去された指揮者の小澤征爾氏に追悼の意を表し、「小澤征爾 追悼特別番組」を放送した。

(6)『USEN magazine』の発行について

2024年4月、会報誌『USEN magazine Vol.07 (2024年4月～2024年9月号)』を発行。業務店/個人宅のお客様にお届けした。

2. 審議課題

「利用シーン」×「番組」

3. 【対象番組】

■D-20 哀悼のセレモニー・クラシック

■H-82 幸せのセレモニー・クラシック

4. 審議

【放送局】

第60期は「利用シーン」×「番組」を審議テーマとする。今回は「D-20 哀悼のセレモニー・クラシック」、「H-82 幸せのセレモニー・クラシック」の2番組を審議頂きたい。これらの2番組は元は「セレモニー・クラシック」という1つの番組で、「冠婚葬祭を執り行う空間に向けたクラシック」として放送していたが、慶事と弔事で分けて欲しいという要望を頂いていたこともあり二分化させ、ターゲット業種と利用シーンを明確にした。

【審議委員】

私は空間デザインをする中で、冠婚葬祭の空間のデザインも手掛けてきた。最近のセレモニーホールは冠婚葬祭どちらでも使える様に、十字架を付ければ結婚式を出来、外せば葬儀を出来る作りになる事が有り、シーンそのものが共通になってきている。そのため、2番組も微妙な違いは有るにしても、そこまで大きな違いは無いのかもしれないが、「セレモニー・クラシック」から2番組に分けた事によって、ある程度違いが明確になったと感じながら聴いた。

先日、テレビで坂本龍一さんの特集番組を放送していたのだが、自分の葬儀で流す為のプレイリストを選曲していたというのを見て、特に音楽家には最期はこういう曲で見送られたいという思いが有るのだろうと思った。

話は変わるが、昨年父が亡くなった。地元にはとある有名な建築家が設計した建物が沢山有り、父の葬儀を行った斎場も設計していたが、怖いので斎場だけはそれまで足を踏み入れた事が無かった。実際に入ると、空気が重いと言おうか密度が高いと言おうか、本当に荘厳な凄い建物で、親が亡くなった悲しみが紛れる程だった。控え室は BGM が流れていて、音楽が有ると無いのとでは全く違い、空間を切り替えるのに大きな影響を与えていると感じた。その空間を切り替える装置の役割は、建築的なトリックの点ではわざとスロープを歩かせる事で非日常と日常を行ったり来たりさせる事でも果たされていたが、そこでも音楽が合わせられていた。改めて BGM の大事さを感じた矢先に「D-20 哀悼のセレモニー・クラシック」を審議する事になったわけだが、哀悼のシーンでは、あまり悲しい BGM にしても仕方が無いと感じた。悲しさを紛らわせると言うか、気持ちを安定させる音楽が必要とされると思うが、ゆったりとしたテンポや優しく穏やかな楽曲を選曲しているとの事で、全部きちっと揃っていると感じた。悲しい雰囲気を出す訳でも無いので、弔事向けだけなのかと言うとその様な事は無く、「セレモニー」と言わなければオールマイティーに様々なシーンで使え、普通のホテルのラウンジで流れていても問題ないだろう。それに対して、もう一方の「H-82 幸せのセレモニー・クラシック」は雰囲気がハッピー過ぎるので、ホテルのラウンジでは浮かれた感じで違和感が有ると思う。他には、寝る前に聴くのに非常に良く、知らないうちに寝てしまうという事も有るのではないかと思う。

サンプルの楽曲では「G 線上のアリア」だけがあまりにも有名で、有名な分かりやすい曲を入れていくのか、抜いていくのか検討する必要があると思う。有名な曲は自分の記憶がフラッシュバックする場合は有り、「G 線上のアリア」はやたら悲しく感じた。また、1 曲 1 曲が長かったが、意図的だろうか？

【放送局】

今回のサンプルではたまたま何曲かオーケストラ作品を含んでいたもので、長い楽曲が多い構成になったが、実際の放送では室内楽のもう少し尺が短い作品も流れる。

【審議委員】

尺が長いと、或る程度の時間を一つの感情で聴く事が出来るので良いと思う。一日中曲を聴いて選曲している USEN のディレクターの職人芸を感じながら聴いた。

一方、「H-82 幸せのセレモニー・クラシック」は、ハッピーで良い。或る程度同じ一つの感情を持たせたい所で聴くと、少し浮く様にも思うが、スロー～ミドルテンポでまとめられていて厳かさや気品、上質な空気が保たれる雰囲気が有って非常に良いと感じた。細かい事を言うと、サンプルの中には「D-20 哀悼のセレモニー・クラシック」でもどちらでも合う曲も含まれていた。放送の中に含まれるのは良いと思うが、どちらでも合う曲が繋がって流れると、ハッピーな気持ちが下がってしまうのではないかと思う。

それにしても、「H-82 幸せのセレモニー・クラシック」も、様々なシーンに合うだろう。例えば、牧場でクラシックを流している所があったり、お酒に音楽を聴かせて熟成させる所もあったりする。ウイスキーの蒸留所のデザインを手掛けているのだが、倉庫にこういう BGM を流すと熟成されているウイスキーにも何か影響が有るのではないか。ウイスキーは倉庫の樽の中で何年も寝かせる中で、海辺に在る倉庫なのか、山に在る倉庫なのか、風通しが良いのか等、細かい環境で不思議と味が変わってくる。吹き曝しではない、空気が動かない筈の倉庫でもそうなのだから、音楽で静かな振動を与えることでも大きな影響を与えられるのではないか。「D-20 哀悼のセレモニー・クラシック」と「H-82 幸せのセレモニー・クラシック」で味が変わるのか、と興味深く考えていた。

【審議委員】

「セレモニー・クラシック」から二分化した事で、番組名が非常に分かりやすくなり、選びやすくなったと思う。

「D-20 哀悼のセレモニー・クラシック」は、歴史的な名曲・名演が並んでいて、どれを取っても気持ちが良い選曲だった。

「H-82 幸せのセレモニー・クラシック」は、名作曲家の室内楽で、演奏しているアーティストはそこまで有名ではないと感じたが、アーティストの知名度はあまり拘っていないのだろうか？

【放送局】

演奏家の知名度よりは、音を聴いて判断している。

【審議委員】

なるほど。どちらの番組も質的には同じ様に感じるが、バックグラウンドが違ふと思ひながら聴いた。「D-20 哀悼のセレモニー・クラシック」は、本当に優しく穏やかで、暗く重い楽曲は避けて癒し効果の感じられる BGM で、聴いていると非常に仕事が進むので、繰り返し聴いている。レクイエム等、宗教的な意味合いを持つ楽曲を避けているというのも今の時代に非常に合っていると思う。ただ、「D-20 哀悼のセレモニー・クラシック」を通夜葬儀・忌日法要向けの番組とするにはもっと厳かな雰囲気であった方が良くと思う。“死”にも色々有り、「ここまで長生きしてよかったよね」と和やかに話せる葬儀も有れば、若い人や子ども、事故等で亡くなり、どう言えばいいのか分からない葬儀も有る。個人的な感覚だが、フルートが入った曲はどこか喜んで聴こえた。管楽器よりも弦楽器の方が厳かなイメージに近く、弦楽器でもソロよりも四重奏、オーケストラの方がより厳かな気がする。ちょっと浮かれているような曲は削除していった方がその場の空気に合うだろう。「G 線上のアリア」は、名曲で聴いていると最高だが、他の委員からも有ったように、個人的な思い出が有る曲や、CM で使われている曲は放送しない方が「D-20 哀悼のセレモニー・クラシック」には合うと思う。

【放送局】

サンプルのフルートとハーブのコンチェルト等は、確かに言われてみたら浮かれている様に聴こえるかもしれない。番組立ち上げ当初は、なるべく哀愁を漂わせたくないという気持ちがあまりに強く、出来るだけメジャー楽曲で構成し、マイナーな楽曲は入れないという基準をもって選曲したので、今ご意見を伺いソッとした。

【審議委員】

その方が時代に合っているかもしれないので、どちらが正しいという事ではない。哀悼のシーンでは参列者は喋らないので BGM がよく耳に入るが、幸せのシーンでは参列者の耳には入らない。「H-82 幸せのセレモニー・クラシック」は、曲の並びが非常に良く、四重奏や三重奏で、テンポも同じで、非常に統一感が有った。何故昔、室内楽が有ったかと言うと、スペースや費用の問題で、品の良い宴会の隅に居るというのが室内楽というイメージが有る。「H-82 幸せのセレモニー・クラシック」は、幸せのシーンの中でも控え室・迎賓・歓談向けとの事だが、控え室・迎賓までは非常に合うと思うが、歓談向けとすると場所が広いのでストリングスが入ったオーケストラの方が良いのではないかと思う。ただ、不思議な事だが、オーケストラよりも室内楽の方が品の良い感じがする。今は技術で何でも出来るので、歓談中の BGM としてベルリン・フィルハーモニー管弦楽団やウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の演奏の楽曲を流すことも出来、それは実は凄いな事だと思う。贅沢を言えば歓談向けの BGM は分けて作った方が良いのではないか。

2 番組共、アウトプットは質が高く似ているが、考え方やアプローチは対照的で、非常に楽しかった。こういう風な音楽が有るとするのが勉強にもなったので、どんどんブラッシュアップして行って欲しい。

【審議委員】

「D-20 哀悼のセレモニー・クラシック」、「H-82 幸せのセレモニー・クラシック」と2つのシーンに分けたというのはとても良かったと思う。2番組共、モーツァルトの明るい楽曲がよく流れたが、私が監修している音楽療法のCDにもモーツァルトの楽曲を多く収録している。音楽療法的には、楽曲の周波数や1/fのゆらぎ、或いは和音が豊富で倍音がどの位出ているかを解析する。それらの点が環境や雰囲気にかかなり影響するためであるが、今回の番組もそのような観点で聴いた。

「D-20 哀悼のセレモニー・クラシック」については、私が実際に斎場やセレモニーに身を置いた時にどうい BGM が流れたら良いか、自分なりに考えてみた。例えば、会葬する人にとっては故人を偲ぶ雰囲気ではなくてはいけない、つまり郷愁を誘うものが必要だ。そして、悲しみは有るが、それを乗り越えていかなければならないという気持ちや故人のご冥福を祈り、天国に召されますようにという気持ちも有る。一方、故人側は会葬者に対して感謝の気持ちを伝えたい、或いは悲しみを乗り越えて元気を出して後は頼むねという気持ち、また、自分自身の霊が音楽によって癒されれば有難いという気持ちが有るかもしれない。要するに、当事者としては、会葬している人と死んだ人の御霊が居る訳で、どうやって BGM をデザインしたら良いのかというのは非常に難しい。

放送される楽曲はクラシックの作曲家が殆どだが、スローテンポの優しさや穏やかさ、安らぎ、癒し等、それぞれの楽曲の中でどの位醸し出されているかという観点で聴いた。音楽療法的には、参列者が癒される、或いは御霊が安らぐという事に対しては穏やかさを誘導する様な、つまり自律神経の副交感神経を誘導する様な音響学的パターンを持つ曲が合っているだろうと思う。今回の番組にはフルートやピアノを使った曲が多く、もちろん名曲でどれも素晴らしい曲であり、音響学的な観点からも良い曲であった。テンポは優しさや明るさ、寂しさなどにかかなり影響するが、2番組はテンポが違い、「D-20 哀悼のセレモニー・クラシック」はスローテンポであった。第二楽章や第三楽章は殆どがアンダンテかアダージョなので、歩く様な速さやゆっくり歩く様なパターンで作曲している訳だが、そういう観点では確かにシーンに合っている。亡くなった方の御霊と会葬に来ている方にとって本当にこの番組がベストかは分からないが、実際に身を置いてみた時に安らぐ事は確かだ。そして元気を出さないといけない、悲しみを乗り越えないといけないという気持ちになるだろうと思う。モーツァルトが作曲したレクイエムの多くはロンド形式で、同じテーマが何度も繰り返される。宗教は違っているが、お経も繰り返しが多く、それにより非常に安らぐ。その為、聴いているとすぐに眠くなるのだが、うとうとするのは音楽療法を受けている様なものだからである。繰り返しの多い曲を聴くと生理的にセロトニンが分泌されることが期待できるので、この選曲は科学的にも合っていると思う。

「H-82 幸せのセレモニー・クラシック」は、確かに「D-20 哀悼のセレモニー・クラシック」よりもテンポが速かったが、サンプルの中でも後半の楽曲が前半に比べてみんなテンポが速かった。これは何か意図するものがあったのだろうか。

【放送局】

意図したものではなく、たまたまこの並びになっている。

【審議委員】

後半ではアレグレットやアレグロ・アッサイまで速まっていたが、意図的に組み合わせても良いのではないかと思う。実際サンプルの中にディヴェルティメントがいくつか含まれたが、「楽しませる」とか「明るく軽妙で人を愉快にさせる」とか、そういう意味合いが有り、確かに聴いていると楽しくなる。作曲家自身がそういう観点で曲を作っているのだから、聴く側もやはり楽しくなると思うが、そういう曲を選んでいくというのは良いと感じた。幸せのシーンは哀悼のシーンとは異なり、食事が進み、会話が弾む雰囲気が出るパターンが良く、科学的にはテンポが少し速くて、周波数が少し高いものだと思う。「H-82 幸せのセレモニー・クラシック」は、聴いていると非常に爽やかで聴きやすく心が明るくなるので、食事が進む、或いは会

話が弾む様な要素が有る楽曲が選曲されていたと思う。明るく、弦楽器が使われているので倍音も凄くよく出ており、高周波の音が非常に心地良く聴こえた。

【審議委員】

2 番組共、文句の付けようが無い。マーケティング的に言うと、出口から決まって入口に持って来るのが良く、一緒くたになっていた番組を慶事用と弔事用に分けることで、ビジネス的に素晴らしい番組が出来たのではないかと。

そこから更に考えてみたが、リスナーが誰なのかという問題が有ると思う。幸せのシーンの方は、新郎新婦が居て、ゲストが居て、はっきりしていると思う。一方、哀悼のシーンは誰に向けているのかというのが難しい。哀悼のシーンに行く時、確かに我々も参列するが、死者も居る。「D-20 哀悼のセレモニー・クラシック」の基本的なリスナーは参列者になると思うが、悲しみや色々な感情を抱く人が沢山居て、時間が止まるとさえ思っている人も沢山居るだろう。一方、死者の気持ちは生きている人達が勝手に想像している気持ちとは少し違うだろう。そこに踏み込んで考えた時に、自分の場合はモーツァルトが良いが、多くの方がどういふものを聴きたいかという結果は分からない。恐らくそれぞれに思いを持っているだろうから、その魂を安らかにする為にはどういふBGMが必要なのか考えながら選曲するのも大切だろう。

【審議委員】

先日丁度法事が有ったので、今回の「D-20 哀悼のセレモニー・クラシック」は実体験として聴く事が出来た。3 回忌なので、もうそんなに涙も無いが、それなりに悲しい事を思い出す人達も居て、楽しいばかりではなかった。そういう時に贅沢な言い方だが、特にフルートが聴こえて来ると、落ち着くが悲しくない。「D-20 哀悼のセレモニー・クラシック」のように暗くない方が確かに救われ、慰めにはなるが、やはりどこか明る過ぎると感じた。病院でも書斎でも何処でも合うと感じ、気持ち良く聴けたが、哀悼のシーンでも亡くなったばかりだったり、葬儀の待合室だったり、そういうシーンでは違和感を覚える事も有るのではないかと思うので、「哀悼のセレモニー・クラシック」でも 2 番組有った方が良い様な気がする。例えば、「哀悼のセレモニー・クラシック(ティアーズ)」と「哀悼のセレモニー・クラシック(メモリーズ)」に分けてはどうだろう。すなわち、「哀悼のセレモニー・クラシック(ティアーズ)」は涙がこぼれる位悲しさに寄り添ってくれる番組だ。ちょっと悲しくても寄り添ってくれると慰めになるので、せめて明るい楽器を外して構成してもいいだろう。

「H-82 幸せのセレモニー・クラシック」は、何も問題は無いし、どんなシーンでも良いと思うが、こちらも 2 番組にするのであれば、例えば「幸せのセレモニー・クラシック(ウエディング)」と「幸せのセレモニー・クラシック(パーティー)」に分けたらそれはまた選曲出来るのではないかと思う。「幸せのセレモニー・クラシック(ウエディング)」の方は、ウエディング・セレモニーのどこかまだ格式を持った番組で、「幸せのセレモニー・クラシック(パーティー)」の方は、もっと明るい若い人達が騒ぎしているかもしれないシーンに向けた番組だ。

【放送局】

色々なご意見を頂いた。2 番組共、恐らく実体験もふまえて、その場にいることを想像して聴いて頂いたと思う。番組資料に、哀悼/幸せの各シーンのセレモニーに向けておすすめしたい番組のラインナップを一覧で記載しているが、1 番組で全シーンをカバーするのは難しいと考えており、例えば幸せのシーンでは「H-82 幸せのセレモニー・クラシック」だけでなく、他の番組も併せて提案している。先程、それぞれを更に 2 番組に分けるという案も頂いたが、改めて我々が多チャンネルでサービスを提供しているという点をもっと工夫して打ち出していきたい。「H-82 幸せのセレモニー・クラシック」は、今日頂いたご意見を参考に、慶事の中でもどのようなシーンに最適かというのを再考してプログラムをよりブラッシュアップさせたいと思う。一方、哀悼のシーンは幸せのシーンに比べると番組のバリエーションが少ない。「D-20 哀悼の

セレモニー・クラシック」を立ち上げた時に、ディレクターはあまりに悲しみを感じさせるのは駄目だと考えたと言っていた。明る過ぎるという感覚と、悲し過ぎるという感覚は文字通り「感覚的な部分」だが、今回のご指摘をふまえより深く考えていきたい。また、フルート等の楽器が与える印象に関する点や、「G 線上のアリア」等の有名曲を選曲するかしないかという点のご指摘の通りBGM にとっては非常に重要な点なので、改めて考えたい。有名曲が入っていないといけないという考えも、有名過ぎる曲は入っていないといけないという考えもどちらも有る。

【審議委員】

私は基本的にはヒット曲を入れようという考えなので、個人的には有名曲が時々入っていた方が聴いた時にやはりいいと思える。例えば、「千の風になって」や「精霊流し」、「木蘭の涙」等、ベタになるがそういった楽曲のクラシックアレンジを入れてみてはどうだろうか。インストゥルメンタルで流れて来ると荘厳な雰囲気になり、馴染みも有るのではないかと。インストゥルメンタルのアレンジも色々出ているので、ちょっと考えて貰いたい。この点は、アーティスト性とBGM 性、いずれを立たせるかという議論に似ている。

【放送局】

そういった楽曲がいきなり流れると、急に悲しみが増し過ぎてはしまわないだろうか。また例えば、CM に使われている曲はその場の雰囲気を変えてしまう力が有るので、選曲はリアルタイムで変えていく必要が有るかもしれない。

【審議委員】

フルートの音色は 1/f のゆらぎが最高だ。明るく感じるし、木管は自然の音に近いし、オーボエはフルートよりもさらに自然の音に近い。

【放送局】

確かにフルートの音色には良さもあるが、明るく感じるというのは共通のご意見であった。「D-20 哀悼のセレモニー・クラシック」は、哀愁まではいかなくとも、もう少し落ち着きが有る方が良いのではないかと考えると、この番組ではフルートは避けた方が良いのかもしれない。

今回の2番組は、元は1番組だった「セレモニー・クラシック」を慶事用と弔事用に分けたものだが、実は過去の審議会で頂いたご意見をふまえて分けたという経緯がある。今回、分けた事に対しては肯定的なご意見を頂いたが、これら2番組がそれぞれ USEN の番組ラインナップの中で成り立って行くのかという、いわゆる番組のポジショニングも含めて再考し、より良い番組にしていけたらと思う。

【審議委員】

葬儀も結婚式も、固定観念にとらわれなくなってきたり、デザインも段取りもパターンが取り払われ、何でも有りになってきている。それに合わせて番組のバリエーションも増やしていかないといけないだろう。

【放送局】

なるほど。市場が次第に自由になっているのであれば、我々のサービスもその市場に合わせて広げて行ければと思う。